

蒲原 ~ 吉原 ~ 原 20.5km を歩く

二日目は吉原駅からスタートして駿河湾沿いの一本道を原駅まで歩く。マップで見る限り特別な見所はなさそうだが.....。

吉原宿は津波の被害で二度も移転した

街道沿いの JR 吉原駅近くの宿を探したが見つからなかった、というのも吉原の街の中心は JR の駅ではないのだ。海沿いを走る東海道線は田子の浦港の近くを走りそのため物資の搬入・搬出の便利さから付近一帯は工場地帯になっている。その代表が製紙工場で大昭和製紙は駅前に有る、でも地図を見ると港から水路が延びているのが分かる。そして、私鉄の岳南鉄道に沿って工場地帯となっていて日産系の自動車産業「ジャトコ」もある。その工場地帯の先に吉原の中心街が広がっているのだ。

吉原宿は東海道が制定された際には田子の浦に面したところに宿が置かれていた。しかし、津波の被害にあい二度も北へ移転した、街道が吉原宿の周りで大きく北へ迂回しているのはこのためである。当時は幕領で百一石余と宿高が少ないため近隣五ヶ村が人馬役を分担し、さらに伝法村が加宿されている。今では宿場周辺はにぎやかな商店街となっており、宿場時代を偲ばせる物はほとんど残っていない。そのためホテルも JR の駅近くではなくて、工場に来るビジネスマンを対象にしたビジネスホテルもジャトコ前駅付近に点在する。



朝陽に染まる富士

朝焼けの富士を見てからスタート

ホテルの部屋からは裾野を広げた富士山がきれいに見える、6.40"に見た富士は頭は白かったが6.49"には朝陽を浴びて赤く染まって美しかった。これまで朝陽に輝く富士は見たことがなく、とても感激した。

7.00"ころにホテルを出て7.09"の電車に乗り吉原駅に向かう、通勤時間にもかわらずお客は少ない。吉原駅でJRに乗り換える人も4人ほどしかいなかった。7.15"大昭和製紙の赤白の煙突を見ながら吉原駅をスタートする、東海道線に沿って少し行くと踏切を渡りあとは一本道のはずである。すぐに薬師堂があり、且つ隣には愛鷹神社がある。その向かいには門前の宿「旅館立場」の看板を掲げた小さな宿があった。立て場は休憩場ということなので、お寺や神社に来るお客さん相手の宿であつたらしい。今はどんな客がくるのだろうか心配になってしまう。

そんなことを考えながら朝の東海道を東に向かって歩いた。

水と戦った先人たちの痕跡が残る

高橋勇吉と天文堀

しばらく行くと立派な石碑と説明板があつた、そこには「高橋勇吉と天文堀碑」と記されていた。どんな人なのかと説明を見てみると.....80ヘクタールに及ぶ三つの新田(大野、桧、田中)を幾多の水害から守つた天文堀は、大野の高橋勇吉が天保7年(1836)から嘉永3年(1850)の14年間の歳月を費やして、完成させた排水用の堀割である。勇吉は自分の田畑や財産を売り払って工事費に当てたといわれ、勇吉が天文の知識や土木技術に優れていたことから、この堀割のことを人々は「天文堀」と呼んだ。今、三つの新田は開発が進み勇吉の天文堀は、その跡を見ることが出来ない.....とある。



高橋勇吉と天文堀碑



海岸の松林

この三つの新田の地名は散策マップを見てみると、バス停として大野新田、檜、田中として載っていた。治水や灌漑など水にまつわる苦労話は全国の津々浦々に存在し、先人たちの努力によって今日があることを理解しなくてはいけない。

その先は単調な行程が予想されたので、海を見ようと海岸に出てみた。先回歩いた千本松原のように、松林が続く海岸は波穏やかで春をも思わせる。でも護岸工事関係の人意外に人気はなかった。それもそうで朝の8.00"前から海に来る人も少なからう。堤防を降りて今度は松林の中を歩いた、細い散策用の道がどこまでも続いている。太陽がさえぎられているので少しひんやりする、吹き付ける風の力で松の木はすべて陸地へ向かって斜めになっているのがよく分かる。

益田平四郎のスイホシ

20分ほどで街道に戻り少し行くと、昭和放水路にぶつかる。橋のたもとには益田平四郎の像・一里塚跡の案内がある。この辺りは沼田新田一里塚があったところ、でも今はなにも残っていない。案内から少し離れた一段と高い所に、石造りの柵に囲まれて大きな石碑と像が建っている。説明には「益田平四郎とスイホシ」とある、スイホシとは何かな.....天保7年(1836)の大飢饉や度重なる水害から村人を救済するため、原宿の益田平四郎が浮島沼の大干拓を計画し、現在の昭和放水路と同じ場所に大排水路を完成させたのは明治2年(1869)の春で、人々は「スイホシ」と呼んだ。事業は身延山久遠寺から多額の援助資金を得るなど、沼から海岸まで505m幅7mの大規模な堀割を建設した。しかし、思いがけなくその年8月の高波で跡形もなく壊されてしまった。平四郎の大計画は頓挫したが、彼の願いと夢は後の人々に受け継がれている.....。このことからスイホシというのは、水を干すという意味のようだ。



沼田新田一里塚跡の案内



スイホシを造った益田平四郎の像

ここにも水と戦った昔の人々の苦勞があったのだ、昨日の雁堤からすでに三つの事業が行われていたことになる。要はこの辺りが低地であったのだ、散策マップには吉原駅と原駅の間に沼田新田、西柏原新田、東柏原新田、一本松新田と昔の地名が載っている。

間の宿柏原の立派なお寺は.....

昭和放水路から5分ほど行くと左手に立派なお寺が現われた、楼閣を備えた山門には両側に仁王様の像がある。立円寺で本堂前には望嶽の碑、大きな錨のゲラテック号遭難碑がまとめられている。ゲラテック号なるものは知らない、望嶽の碑は何かと見てみると.....文化5年、尾張藩の侍医柴田景浩は江戸への途中、しばらく立円寺に滞在しここから見た富士の景色をたたえて碑を建てた.....とある。要はすばらしい景色に感動してその思いを碑に記したというのだ。相手が富士山だけに異を唱える者はいないし、それをPRに生かそうとしているわけだ。

お寺の向かいには間の宿柏原・本陣跡の案内がある、柏原の立場の名物は、浮島沼で獲れる鰻であった。現在、茶屋だった柏屋の子孫が旧本陣屋敷跡地で食堂・旅館を営み、往時のものという小さな築山が残っている。

ここから少して東田子浦駅前を通り30分も行くと、門からフェンスまで葉牡丹などたくさんの花で飾られたお宅が現われた。見るとガーデンコンクールで市長賞受賞とあった。花があるのは美しいが、見た目にも鮮やかに配置するのはなかなか難しいものだ。ここから20分ほど歩いたころ愛鷹浅間神社(三社宮)がある、2時間ほど歩きちょっとばかりお疲れモードになってきたので、お参りして休憩した。ここの祭神は木花咲耶姫で私の地元の伊久智神社と同じであった。



立円寺と富士を背にする望嶽の碑



市長賞受賞の庭

お酒の名前になった「白隠禅師」

休憩して歩き出すと直に原宿の西木戸(見付け)跡の案内が現われた、原宿の東西の距離は660間(1.2km)あったと記されている。いよいよ原駅はまじかで、あとひと踏ん張りである。そこから2分も歩くと見覚えのある酒屋が有る、駅前の交差点まできたのだ。

立派な酒屋は「白隠正宗」の看板を掲げる蔵元の高嶋酒造株式会社で、蔵の前には富士山の霊水という看板がある。そこには144.5mの自噴井戸からくみ上げる、水質表示がされている。そして、おもしろいことに白隠正宗の看板には「沼津五百万石」とも書かれている。この白隠とは「駿河には過ぎたる物が二つあり、富士のお山に原の白隠」とうたわれた臨濟宗の名僧白隠禅師の名前である。でも五百万石は... 沼津に大名の本拠が置かれるのは安永6年(1777)11月6日、水野出羽守忠友が三河大浜藩より二万石で転封してきた。その後5.000石さらに5.000石加増されて三万石であった。次の二代藩主水野忠成(ただあきら)は徳川家斉の時代に老中として権勢を揮い、一万石さらに一万石の加増があり五万石だったはず。ことさら沼津を引き立てさせる為に何故か百倍しているのかな??

ちょっと意味が分からない。それより、肝心の富士の霊水が無料で自由に汲めるようになっており2.3人が水を汲んでいた。それを見て奥方連中は、これは汲まなきゃとばかりペットボトルの残りのお茶を捨てて、さらに水筒にも霊水を汲んできた。その場で少し飲んでみるが味はよく分からない。



「白隠正宗」の看板を掲げる蔵元の高嶋酒造株



そして、10.20"原駅に到着し歩数は15.800だった。10.25"発島田行きに乗り帰路についた。昼飯は静岡辺りで下車して食べるつもりだったが、先回の江尻宿では清水次郎長の墓をお参りしていないことを思い出した。せっかくここまで来たので清水駅で途中下車した、梅院禅寺のお墓をお参りして生家に立ち寄ってから帰った。